

400年の時をこえて

平戸オランダ商館復元10周年記念

「ART SEEDS HIRADO2021」のアートの一部として平戸オランダ商館2階に展示されているシューレン(オランダの定番ゲーム)で遊ぶ子どもたち。



2011年9月に4世紀の時を経て復元された平戸オランダ商館。

日本と海外をつなぐ貿易地として栄えた平戸の歴史を語るうえで欠かせません。

取り壊し直前の姿をそのままに復元した石造建築物は当時の平戸の風景を今に伝え

今なおあらゆる交流の拠点となっています。

復元から10年、

これまでの歩みと平戸オランダ商館の向かう先は



1_ミュージアムショップでは、その時開催している企画展の関連商品や来館の記念品、オランダのお菓子などが購入できる。/2_平戸オランダ商館長の執務室を再現したコーナー。当時の商館の仕事を手感できる。/3_1階展示スペースでは、平戸と海外との交流の歴史を時系列で展示。



3

4世紀の時を経て復元

平戸瀬戸に面し、平戸城と平戸大橋を望む場所に立つ平戸オランダ商館。1640年に取り壊しを命じられてから4世紀の時を経て、2011年9月に復元されました。復元された平戸オランダ商館の外観は、1639年に建てられた日本初の洋式石造建築物とされる「1639年築造倉庫」の姿がそのまま再現されています。禁教と鎖国の流れにより、幕府の命でわずか33年余りで取り壊された当時の平戸オランダ商館の姿を今に伝えています。

歴史の流れを体感

平戸オランダ商館1階の展示スペースでは、1550年から始まるポルトガルやスペインなどの西欧諸国との交流、オランダ船の到来をきっかけに始まるオランダとの交易、莫大な利益を生んだ平戸オランダ商館の全盛期とその終えんまでを歴史の流れに沿って展示しています。さまざまな展示品から当時の平戸の様子を思い浮かべることができます。

また、平戸オランダ商館長の執務室を再現したコーナーや、当時の商

館の仕事を手感できるゾーン、長年の復元にかかる研究成果と復元までの経緯や様子を動画で紹介するコーナーなどもあります。

平戸が西欧諸国との繋がりを持ち始めたころから現在に至るまでの歴史について、体験を交えながら学ぶことができます。2階では、これまでに収集した書籍や資料を閲覧できるほか、復元された建物の構造を学べるコーナー、企画展や市民活動の場として活用されている多目的スペースがあります。

歴史を語る、貴重な資料

平戸オランダ商館に展示されている資料は、商館時代に平戸にもたらされた品や当時の平戸の姿を描いた地図や書物、絵画など貴重なものばかり。当時の平戸の様子を伝えるために、日本国内はもちろん貿易の中心地やオランダで調査・収集した品々です。



海外から伝わったさまざまな資料が展示されている。

Information

平戸オランダ商館

- 営業時間 午前8時30分～午後5時30分(休館：毎年6月第3火・水・木曜日)
- 入館料 大人 310円(280円)、子ども 210円(180円)
※()内は20人以上の団体利用料金
※障がい者手帳をお持ちの方は、手帳の提示で100円で入館できます。
※「高齢者いきいきおでかけ券」も利用できます。

▼平戸オランダ商館ホームページ



栄光と終焉、そして復元へ

海外貿易の拠点として「西の都」と呼ばれるほどに栄えた平戸。とくに平戸オランダ商館での貿易は大規模で、さまざまな物や文化が伝わりました。しかし、禁教の流れを受け、平戸オランダ商館は長崎・出島への移転を余儀なくされます。激動の33年の平戸オランダ商館の歴史と復元までの道のりに迫ります。

東アジアの貿易拠点

1600年、オランダのリーフデ号が豊後(現在の大分県)に漂着したことをきっかけに、日本とオランダの交流が始まります。1609年には、2隻のオランダ船が平戸に來航。当時の平戸松浦家の当主松浦鎮信(法印)やウィリアム・アダムスなどの協力により、オランダ船は日本での交易の許可を得て、平戸オランダ商館が開設されました。

オランダ商館長日記などの記述によると、当初は商品を保管するため、土蔵の付属した住宅1軒を借りることから始まったとされています。その後、貿易が拡大するに従い、施設の拡大整備が行なわれました。特に、タイオワン事件(台湾での中国貿易をめぐるオランダ商館との紛争事件)によって、1628年から5年間交易が途絶えた後、1637年と1639年に建設された倉庫は規模が大きく、「西の都」と呼ばれるほど賑わっていた当時の平戸を象徴するものでした。

オランダとの貿易

当時、平戸オランダ商館が日本に

持ち込む商品の8割以上が反物類で中国や東南アジアなどで手に入れたものでした。その対価として、平戸をとおして多くの銀が持ち出されたと言われています。

また、「遠眼鏡」オランダ絵画「琥珀製腕輪」などの珍品と言われるものも持ち込まれました。その多くは將軍や幕府高官、平戸領主の松浦家関係者などへの贈答品として贈られたようです。

平戸オランダ商館の終えん

このように貿易で莫大な利益を上げていた平戸オランダ商館は突如終えんを迎えます。1640年11月9日、將軍徳川家光の命を受けた大目付井上政重は、1639年建造の倉庫にキリスト生誕にちなむ西暦の年号が記されているとして、当時の禁教令の下、全ての建物の破壊を命じました。その後、1637年建造の石造倉庫や住居なども順次破壊を命じられ、1641年、ついに平戸オランダ商館は長崎出島へ移転されることとなります。これによって、33年間の平戸オランダ商館の歴史に幕が下ろされました。

以降、跡地は平戸の町人地となり、

1_1700年ごろに出版された世界地図。平戸は「Firando」と記載されている。/2_1669年に初版が刊行されたモンタヌスの「日本誌」では、17世紀の日本の様子とともに、平戸オランダ商館が描かれている。/3_日本とオランダの交流のきっかけとなった「リーフデ号」の模型。/4_平戸オランダ商館初代・第3代館長ジャックスペックス(1588-1645)の肖像画。初期の日蘭交流の推進に貢献した。

「御船手屋敷」(船を操る人たちの屋敷)が建ち並びました。江戸時代の絵図をみると、井戸に「阿蘭陀川」、堀に「阿蘭陀堀」と書き込まれており、商館の遺構のいくつかは、江戸時代を通じてオランダの名を付して呼ばれていました。それらの遺構は今でもオランダ商館の周辺に当時の姿のまま残されています。

復元までの道のり

時は過ぎ、1922年に平戸オランダ商館の跡地は「平戸和蘭商館跡」として国史跡の指定を受けます。その後、1987年からは本格的な発掘調査が開始され、その結果、当時の平戸オランダ商館の姿が少しずつ浮かび上がります。

商館の復元の基礎となったのは、1639年築造倉庫を作るための材料を記した会計帳簿。その中には、材料の寸法やその数量、大工の賃金などが詳しく書かれていました。その帳簿をもとに設計図が作られ、復元へと至りました。復元にあたり、市民からも広く寄付金を募集し、寄付者の皆さんの名前は、平戸オランダ商館の石材に記され、建物の一部となっています。

Interview



平戸オランダ商館
日高 裕三さん

平戸オランダ商館での貿易を通して、日本には生糸やスパイス、砂糖、武器、革製品などさまざまな物が輸入されました。それらと一緒に、海外のデザインや技術も伝わっており、その後の日本の文化にも大きな影響を与えています。当時の日本の流行の最先端は、平戸であったといっても過言ではありません。

現在の平戸オランダ商館には、当時伝わった品々が展示されています。レプリカではない本物も数多く展示しているので、実際に足を運んで見てほしいと思います。展示物は定期的に入れ替えを行い、何度来ても楽しめるよう工夫しています。市民の皆さんのご来館をお待ちしています。

周辺に残るオランダとの貿易の記憶



オランダ井戸

大小ふたつの石枠を組み合わせて造られた井戸で、生活用水として活用されていました。



オランダ堀

1618年に築造され、商館本館、倉庫、火薬庫、病室などの目隠しとして作られました。



オランダ埠頭

商館の船着場として、商館員、船員の乗り降りや、積荷の上げ下ろしに利用されていました。



Firando club
会長 小関 彰博さん

「活動をとおしてさまざまな 交流が生まれています」

Firando clubは、当時のオランダ商館の暮らしや歴史、文化について楽しく学ぶことを目的とした団体です。昔の暮らしを学び、現在の暮らしに役立ててもらいたいと思っています。

これまでに、研究者を呼んでの講演会や古地図を見ながら街歩きをするワークショップなど歴史を学ぶ活動はもちろん、平戸にUIターンしてモノづくりをする人たちや市内外のアーティストを集めた「商館フェイスチェ」などを行ってきました。このような活動をとおして、参加者同士の交流が生まれ、ワークショップではいろいろな発見がありました。

今後は、ヘリテージネットワークとも関わり、Firando Clubが海外からの受け入れの母体となり交流を深めていければと考えています。また、平戸オランダ商館と一緒に、もっと市民の皆さんが気軽に利用できる施設になるよう活動していきます。



広がる世界、繋がる世界

2011年のオープン以来、平戸オランダ商館ではさまざまなテーマの企画展を開催。また、かつて東インド会社の貿易拠点であった地域を結ぶヘリテージネットワークの発足や、平戸オランダ商館文書の翻訳プロジェクトなどさまざまな取り組みを行ってきました。

企画展で広がる世界

平戸オランダ商館では、年間5〜6回の企画展を開催しています。これまで、平戸・オランダの交流の歴史や平戸の殿さまのマニアックなコレクション、カレーと香辛料、現代アートなど歴史や文化にとどまらず、さまざまなテーマを取り上げています。

特に、2014年に開催された「十人十色展」は、当時の日本では聞きなじみの無かった「LGBT」について取り上げたもので、国内の博物館ではLGBTをテーマにした初の企画展でした。世界でもセクシャルマイノリティへの理解が進むオランダとの関係が深い平戸オランダ商館だからこそできる企画展となりました。

かつて貿易の窓口として世界からさまざまなモノや文化も平戸にもたらした平戸オランダ商館は、現在でも来館者に新たな世界を知るきっかけを提供しています。

ヘリテージネットワークで繋がる世界

かつて東インド会社の貿易拠点があつたアジアの各地域でつくる「オランダ商館ヘリテージネットワーク」。2014年に平戸オランダ商館が発起人となり、設立に向けた取り組みを開始し、2015年5月に6カ国10地域が参加し発足しました。これまでに7回の国際会議を開催。参加する地域も7カ国13地域まで増えています。国際会議では、それぞれの地域で行われてきた研究成果の発表を通して、歴史に対する認識を共有してきました。令和2年には、発足から5年間の取り組みの成果について、平戸オランダ商館で展示会を開催しました。

過去に東インド会社を通じて繋がっていた地域が、時を越えて再び繋がりが、さらなる交流と新たな取り組みを生み出すとしています。

4



歴史を語る600通の文書

オランダのハーグ国立文書館には約600通もの平戸オランダ商館に関する文書が所蔵されています。平戸オランダ商館では、それらの文書を現代語に書き起こし、和訳するプロジェクトを同文書館やオランダのライデン大学、国際日本文化研究センターなどと共同で進めています。

その成果として、これまで不明であつたウイリアム・アダムスの1611年〜12年の足取りを示す資料が発見され、東インド会社の代理人として日本各地で取り引きに関わっていたことが明らかになりました。今後このプロジェクトを通して、新たな発見と学術研究への貢献が期待されています。

1_オランダ人アーティストがデザインし、平戸の事業者が作り上げた新しいお菓子が発表された『オランダ茶会』。/2_アーティストのYellow Yellow氏が世界各地から収集したもので黄色の世界を表現した『Yellow Yellow Yellow展』。/3_国内の博物館では初となる「LGBT」をテーマにした企画展『十人十色展』。各種メディアにも取り上げられ、東京・原宿でも開催。/4_2019年にマラッカで開催されたヘリテージネットワークの国際会議。かつてオランダ商館があつた7カ国13地域が参加した。

ART SEEDS HIRADO 2021

▶ 11月30日(火)まで開催



原倫太郎+原游
「平戸双六」
@平戸オランダ商館
平戸の歴史を遊びながら学べ、オランダ商館所蔵品のゲームも作品の一部となった体験型アート。巨大双六。

山本麻世
「an ambilical cord」
@松浦史料博物館下
潜伏キリシタンとアニミズム。禁じられることで変化を強いられ流動的に姿を変えていく可能性を形にした。



ケース・ヴァン・レーベン
「Sculpture2:Ceremony for space」
@閑雲亭
国籍や文化を超越したユニバーサル・スペースを主題とした立体作品。

「X AKI」
オランダからの作家たち
@平戸城地蔵坂櫓
蓮輪友子がオランダ滞在中に出会ったアーティストを紹介するグループ展。



平戸の町並みを展示会場に見立て、オランダにゆかりのあるアーティストたちによる、平戸の風土や歴史と結びついた作品が市内に出現します。



花岡美緒
「Persona uou grata」
@平戸城城壁
距離とアイデンティティをテーマに、平戸城の狭間から覗き見る、オランダ商館とのかつての敷地を浮かび上がらせるインスタレーション。



アライイリエアーキテクト 有井淳生+入江可子
オンデルデリンデ 久米希美+植村遥
「ア」風の吹く場所」
@平戸オランダ商館横広場
風邪とともに育まれた豊かな風土を祝す交流の場として、帆船時代の記憶と共に秋風を視覚化するパビリオン。



畑直幸
「Faith and Ground」
@平戸屋
密かに自らの信仰対象を祀り、信仰を続けた平戸の風景を独自の視点で切り取り、自身の作品と併せて展示。

蓮輪友子
「Tsukel」
@按針の館(駕屋)
平戸に約1カ月間滞在し、平戸で暮らす人々とオランダに暮らす人たちに着想を得て制作した絵画。また、制作に携わった平戸中学校の生徒たちの様子も放映。



新たな船出、目指す先は

平戸とオランダをつなぐ貿易の拠点として誕生した平戸オランダ商館は、時を越え同じ場所によみがえりました。学術研究の場、文化交流の場としての役割を果たす平戸オランダ商館は、今後どのように舵を取り、進んでいくのか。今後の平戸オランダ商館の展望を館長に伺いました。



公益財団法人 松浦史料博物館
平戸オランダ商館
館長 岡山 芳治さん

「平戸オランダ商館だからできることを考え学術研究と文化交流を進めていきたい」

平戸オランダ商館は、復元から10年の節目を迎えますが、復元に至るまで長年の発掘調査や学術研究が行われ、多くの人の願いにより復元されました。運営にあたり、その想いを重く受け止め、これまで松浦史料博物館で得たノウハウを活かしながら、平戸オランダ商館を広く発信していけるよう努めています。

これまでの10年は、平戸とオランダの交流の歴史やオランダの文化について展示やイベントを通して伝えてきました。また、「LGBT」や「現代アート」など歴史・文化に限ら

ずさまざまなテーマで企画展を開催してきました。このような取り組みは、かつて海外から最先端の文化や価値観を受け入れた平戸の風土とその窓口であった平戸オランダ商館だからこそできることだと思っています。

また、2014年に始まった「オランダ商館ヘリテージネットワーク」は、今後も地域間で一つになって歴史の研究を進めるとともに、インターシッブ交流や観光・物産などの経済的な交流にも発展させていければと考えています。現在、政府が行っているインバウンド政策の対象

地域がヘリテージネットワークの参加地域である事から、インバウンド対策にも貢献できるのではないかと思っています。

これからも資料の収集、保管、調査研究および展示・教育といった博物館としての使命を果たしながら、オランダとの繋がりを活かして世界に通じる芸術や文化を伝えていきます。さらに、地域の価値の発見と創造という観点から、平戸オランダ商館のもつ知識や特色を活かしながら「まちづくり」にも関わっていききたいと思っています。

平戸オランダ商館だからこそできることを考えながら、学術研究と文化交流をより一層進めていきたいと思えます。市民の皆さんにも、ぜひ平戸オランダ商館に足を運んでもらいたいですね。



人種の異なる親を持つハーフの人たちの考えに迫った『Hāfu2Hāfu』展。かつて多様な人種が行きかった平戸オランダ商館らしい企画展。